農 業 技 術 情 報

令和７年９月１５日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター
十勝東部支所　015-572-3128
ＪＡ十勝池田町　572-3131
高島支所　573-2111
池田町農林課　572-3118

農作物の生育･作業の遅速（9月15日現在）　　（ ）内は平年値

作　物　名	遅速日数	生　育　状　況		農作業状況
大豆	+9	茎長　93.7 (73.3)cm 葉数　10.4 (9.6)枚	着莢数　莢/㎡ 643.3(563.6)	
小豆	+10	茎長　69.4 (58.0)cm 葉数　10.4 (9.6)枚	着莢数　莢/㎡ 423.5(327.1)	収穫始　9/10 (9/17) 収穫期　(10/1)
金時（秋晴れ）	―	茎長　62.8 (46.2)cm 葉数　4.3 (4.0)枚	着莢数　莢/㎡ 160.8(146.2)	収穫始　8/26 (8/31) 収穫期　9/ 8 (9/ 7)
手亡（白つむぎ）	+3	茎長　59.2 (47.2)cm 葉数　7.2 (7.2)枚	着莢数　莢/㎡ 260.9(210.9)	収穫始　9/12 (9/12) 収穫期　(9/19)
てん菜（直播）	-10	根周　28.9(33.9)cm		
牧　草	±0	草丈　85.9 (86.3)cm		収穫期　8/29 (9/ 6)
サイレージ用とうもろこし	+7	稈長 303.0(282.6)cm	糊熟期　8/27(9/1) 黄熟期　9/6(9/13)	収穫始　9/12 (9/14)

畑　作

１ 秋まき小麦

１）は種と施肥量

①は種時期

越冬前の葉数は５葉を目標に、４～６葉が確保できる時期が「は種時期」です
越冬前に適正な生育量を確保するため、適期は種を心がけてください。

②は種量

適期は種で 140～180 粒/ｍ²とし、は種時期の早晩により、は種粒数を増減します。
本年の種子は千粒重が軽いので、は種粒数が多くなる可能性があります。
播き過ぎに注意してください。

表１　は種時期別のは種量例（池田アメダス過去 10 年平均気温から積算気温を算出）

は種時期		早期	**適期**	晩期
		9/20～23	9/24～28	9/29～10/1
は種粒数(粒/㎡)		110～140	140～180	180～255
は種量 (kg/10a)	種苗センター産 (36.8g)	4.1～5.2	5.2～6.6	6.6～9.4
	士幌産 (36.0g)	4.0～5.1	5.1～6.5	6.5～9.2

※は種量例は、発芽率 90%として算出しています。
これより出芽率が低いほ場では１割程度増しましょう。
下記に 36.0g での計算例を示しました。参考にしてください。

＜は種量の計算例＞

以下は、千粒重36.0g の種子を160粒は種する場合です

式　【千粒重（g）×は種粒数（粒/㎡】　÷1000　＝【は種量

36.0g　×　160（粒/㎡）　÷1000

↓

0.0360kg　×　160000（粒/10a）　÷1000　＝　5.760(kg/10a)

出芽率90%の場合　5.760　÷　0.9　＝　6.400(kg/10a)

③は種深度

は種が深すぎると二段根、出芽ムラで初期生育が劣ります。均一な出芽と良好な初期生育を確保するために

a　砕土を細かくしすぎない

b　は種前に鎮圧する、等の処理を行い、**は種深度は２～３cm** とする。

浅まきの場合、出芽は早くなりますが根張りが悪くなり、その後の生育に影響してきます。また、深まきした場合は出芽が遅れ、越冬前の生育量が足りずに雪腐病発症の危険があるため、適正なは種深度を守りましょう。

④施肥量

リン酸、カリ、苦土は全量基肥として施用しましょう。窒素は越冬前に小麦が吸収する量は４kg/10a 程度です。

過剰な窒素施用はコストが無駄になるほか、越冬後の茎数コントロールが困難になります。また、土壌凍結が浅い年では下層に流亡して地下水・河川汚染の原因となりますので、適正な施肥を行いましょう。

表２　は種時の施肥量（kg/10a）　　（北海道施肥ガイド 2020 より）

土壌型	窒素	リン酸	カリ	苦土
低地土	4	12	9	3
火山性土	4	15	10	4
台地土	4	14	9	4
泥炭土	4	14	10	4

【基肥施肥例】
「BB850」×50kg/10a の場合
窒素-リン酸-カリ-苦土=
4-12.5-5-2.5　kg/10a

⑤雑草対策

雑草が小麦に与える害としては「養水分の収奪」「病害虫繁殖の助長」などがあり、結果的に収量、品質の低下に繋がります。

除草剤を適正に使用し、雑草対策を行ってください。

表３　秋まき小麦は種後除草剤例

薬剤名	処理方法	使用時期	薬量 ml/10a	使用回数
ガルシア フロアブル ※１,２	全面土壌散布	は種後～出芽前 （雑草発生前）	150～250	1回以内
	雑草茎葉散布 又は全面土壌散布	小麦出芽直前～小麦３葉期 （雑草発生前～発生始期）	100～200	
ガレース乳剤 ※1,2	全面土壌散布 （雑草発生前）	は種後～出芽前	200～250	1回以内
		小麦出芽後～出芽揃期	150～250	
	土壌兼雑草茎葉散布	小麦の１～３葉期 （雑草発生前～発生始期）	100～150	
		小麦の４～６葉期 （越冬前）	200～250	

※1 イヌカミツレが多発するほ場では、使用基準の範囲内において高薬量で使用する。
※2 ガレース乳剤・ガルシアフロアブルは同一成分のジフルフェニカンを含んでおり、いずれか１回のみの使用とする。

２ 豆　類

豆類は収穫作業のタイミングが遅れないよう注意しましょう。

①小豆の収穫

収穫適期の目安は「熟莢率」で判断し、未熟粒、過熟粒にならないよう適期収穫に努めましょう。

表４　小豆の収穫適期の目安（H14・H16 中央農試　H9 十勝農試）

区分	収穫時期の目安	収穫早限の目安
ピックアップ収穫	完熟期（熟莢率100%、子実水分16～18%）から２週間以内	熟莢率80%、子実水分25%程度
ダイレクト収穫		①汎用コンバイン（４条） 熟莢率90%、子実水分25%程度 ②豆用コンバイン（２条） 熟莢率80%、子実水分25%程度

② 大豆の収穫

ア 汚粒対策

青立ち株（わい化病株）や雑草（特に紫色の実をつけるイヌホオズキ）は事前に抜き取っておきましょう。

また、土砂の混入も汚粒の原因となるので、倒伏がみられるほ場や培土の高いほ場では刈り高さに注意して収穫作業を行いましょう。

イ 収穫適期

汚粒の原因に大豆の刈り取り時期も大きく影響します。子実水分が 20%以下（最終は 16%以下）とし、茎表面に「ぬめり」がある時は収穫を止めましょう。

また、刈り遅れも子実の外観品質に影響します。可能な限り適期収穫を心がけましょう。

※コンバイン収穫の場合、収穫適期幅は短いため、事前にコンバインの点検・整備を入念に行いましょう。熟莢率が 100%となり、子実水分が 20%以下となったら試し刈りを行いましょう。茎表面に「ぬめり」があるときは収穫を中止しましょう。

３ てんさい

①褐斑病

褐斑病が蔓延しています。

最終防除をまだ実施していない場合は、防除を行ってください。

②シロオビノメイガ

各地で大量に発生しており、池田町でも確認されています。

発生しているほ場では、ディアナＳＣを散布してください。

表５　シロオビノメイガ防除例

農薬名	使用倍率（倍）	使用時期（収穫前）	使用回数（以内）	RACコード
ディアナＳＣ	5,000～7,500	前日	２回	5
プレバソンフロアブル５	4,000～5,000	前日	２回	28
マッチ乳剤	3,000	14日	２回	15
カスケード乳剤	4,000	７日	４回	15

③床土の準備

来年用の床土を準備する際には病気の恐れのない土を用意し、pH 測定後、6.0～6.5 になるよう酸度を矯正しましょう。

ほのぼの情報や農作物防除基準を参考に適正防除に努めてください。

野　菜

＜にんにく＞

（１）　植え付け前の種子消毒

チューリップサビダニ、イモグサレセンチュウ、黒腐菌核病対策として必要に応じた種子消毒を実施してください。

表１　種子消毒薬剤例

時期	薬剤名	対象病害	使用濃度(倍)	使用時期	使用回数
種子消毒	ガードホープ液剤	チューリップサビダニ	500	植付前	１回以内（種子消毒）
	ベンレートT水和剤２０（種球湿粉衣）	黒腐菌核病	種球重量の0.5～1%	植付前	１回以内
		イモグサレセンチュウ	種球重量の1%		

○種子消毒例

ガードホープ液剤（500 倍）30 分種球浸漬
↓陰干風乾
ベンレート T 水和剤 20（種子重量の 1%）種球湿粉衣
↓日陰干し（1～2 日）
植え付け

（２）pH 矯正

pH6.5 を目標に矯正してください。pH5.5 以下では茎葉伸張、球肥大が抑制されます。

（３）イモグサレセンチュウの防除

必要に応じて、殺センチュウ剤の土壌混和を実施してください。

表２　植え付け前防除薬剤例

時期	薬剤名	対象病害名	使用時期	薬量	使用回数	備考
植付前	ビーラム粒剤	イモグサレセンチュウ	植付前	20kg/10a	１回以内	全面土壌混和
	ラグビーMC粒剤			30kg/10a		

＜ながいも＞

(1) つる切り、つる降ろし

・つる切り、つる降ろしは、茎葉が黄変した後に実施してください。黄変前のつる切りは未熟いもの原因になるため注意してください。

・実施前に試し掘りをし、尻部が丸く硬くなっていることを確認してから行ってください。

・茎葉黄変になる前に霜を受けたほ場では、10 月 20 日以降につる切りを行ってください。

※2006 年に東部管内で実施した調査で、10 月 20 日以前(茎葉黄変前)に強い霜を受けて茎葉が枯死しても、いもへの養分転流は進むことが確認されています。

＜たまねぎ＞

（１）有機物(堆肥)の投入

現状の地力を維持するためには、堆肥で２～３t/10a が必要とされています。堆肥等の有機物を投入し、気象変動に対応できる土づくりに努めてください。

（２）透排水性の改善

収穫や収穫物の搬送作業など､大型機械による踏圧により透排水性が悪化しています。コンテナ搬出後にサブソイラ等による心土破砕を実施してください。

（３）土壌改良資材の施用

・たまねぎの適正ｐＨは 6.0～6.5、有効態りん酸は 60 ㎎～80 ㎎/100g です。

・低ｐＨやりん酸不足は、定植後の初期生育の遅れや葉先枯れ、登熟の遅れ等、生育に影響があります。また、りん酸の過剰は茎葉の早期枯れ上がりの原因となり減収につながります。

・土壌診断を実施し、健全なほ場管理を行ってください。りん酸、加里の蓄積が見られる場合は、減肥銘柄の選定により施肥バランスの改善を図ってください。

（４）来年の苗床準備

・熟畑化した苗床は、有効態りん酸や加里の蓄積により土壌養分のバランスがくずれ、育苗中に生育障害が発生しやすくなります。

・事前に苗床のｐＨ、ＥＣを測定して、土壌分析値に基づいた土壌改良および適正施肥を行ってください。

（５）融雪水の対策

ハウス周辺からの融雪水の侵入に注意が必要です。今のうちから、ハウス周辺の明きょ設置やハウスビニールの縁の埋設などの対策を行ってください。

多忙な農繁期における農作業事故防止に努めましょう!

ばれいしょや豆類の収穫と小麦のは種作業が重なり、心身の疲労が心配されます。一層の事故防止に努めましょう。

１　トラクタ発進・ＰＴＯ始動時は、クラクションなどを鳴らし周囲に合図する。

２　機械の調整・整備時（つまり物除去等）は必ずエンジンを止める。

３　機械の飛び降り・飛び乗りをしない。

４　作業機を上げ点検する時やつまり物を除去する時は、作業機の下降を防止するため「固定脚」や「かませ木」を用い下降防止に努めましょう。

５　夕方や夜間に公道を走行する時は、車幅灯を取り付ける。